

一石路ガイドマップ 一石路句碑

青木村には次の三つの一石路の句碑があります。



句碑① 青木村郷土美術館前



シャツ 雑草に
ぶつかけておく
(大正15年 32歳)

句碑② 夫神 庚申堂前



義民 いまは神にして
冬の山はあり
霜の菊の咲きいづる
なおも 一輪二輪
(昭和24年 55歳)

句碑③ 細谷 一石路の家前



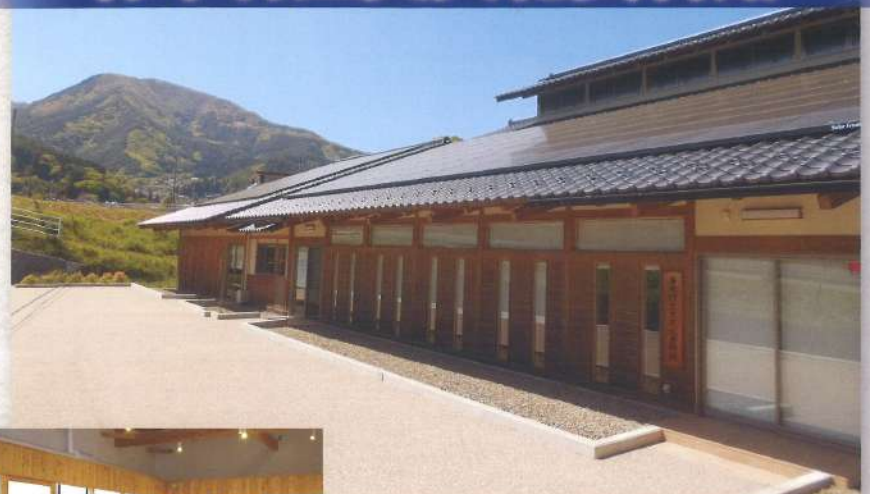
ぼんおんと鳴る
鐘きいて
畑をしまひけり
(大正6年 23歳)



○交通案内

- (電車) JR長野新幹線 上田駅より
千曲バス 青木線
青木バスターミナル下車 徒歩5分
- (自動車) 上信越自動車道 上田青平ICより40分
坂城ICより25分
長野自動車道 麻績ICより25分

青木村歴史文化資料館



義民資料展示室



栗林一石路書斎(再現)



栗林一石路資料展示室

資料館の建物は、長野県産の木材を使用しております。

- 開館時間 午前9時～午後5時 (最終入館 午後4時30分)
- 休館日 毎週月曜日・祝日の翌日・年末年始 (月曜日が祝日の場合は翌日火曜日が休館)
詳しくは、青木村 五島慶太未来創造館ホームページをご覧ください。
- 入館料 無料 (五島慶太未来創造館からお入りください。)
- 駐車場 村営駐車場、青木村図書館・青木村文化会館の駐車場をご利用ください。

〒386-1601 長野県小県郡青木村大字田沢3270-3
TEL・FAX 0268-49-0303 E-mail: gotosozokan@vill.aoki.nagano.jp

青木村義民資料展示室

江戸時代青木村から起こった百姓一揆は、天和2年(1682年)の一揆から信州の世直し一揆の先駆けとなった明治2年(1869年)の騒動まで、全藩惣百姓一揆の宝暦騒動(1761年)を含めて5回ありました。

「夕立と騒動は青木から」という言葉が、上田に近い里山の村人の中で語られるほど、同じところから5回も一揆の指導者を輩出しているのは大変珍しく全国的にも注目されています。

資料展示室では、青木村を中心とした義民関係資料と、百姓一揆・義民研究の第一人者である林基先生より寄贈いただいた約4,000点にのぼる資料や蔵書の一部を展示しています。



【天和の義民増田与兵衛】 天和2年(1682年)
作物がよく実らない年が3年続き百姓が苦しんでいるのに、庄屋は年貢を余分に取り立て、横領したり藩の役人への賄賂につかっています。増田与兵衛は庄屋の横暴を藩主の仙石政明に越訴しました。役人の調べで訴えが事実であることが証明され、余分に取り立てられた年貢は百姓に返されました。しかし、掟によって増田与兵衛父子は夫神川原で処刑されました。

【享保の義民平林新七】 享保6年(1721年)
中挾村の駕籠入りというところは、古くから検地が入らないところでしたが、しきたりを無視した役人が検地を強行しようとしたので組頭の新七は、やめるように願いました。しかし、役人には聞き入れられず、新七は覚悟の上で役人を鎌で斬り殺してしまいました。新七は処刑されましたが、藩主は役人の無法を認め、中挾村には年額45俵の減免が言い渡されました。



【宝暦騒動】 宝暦11年(1761年)
宝暦騒動は、上田藩の民政を根底から揺るがした最初の中全藩惣百姓一揆でした。藩財政の苦しさもあって百姓の金納年貢額も高くなり、諸負担や不作にかかわらず粗の増額が示されました。田沢村庄屋金次郎、夫神村庄屋太郎兵衛、組頭浅之丞、百姓半平らが計画を練り、強訴したとされています。宝暦11年12月11日夜、鎌やまさかり、斧などを腰にさして塩田、福田村に声をかけ、翌12日上田城に押しかけました。

年が明けて宝暦12年、一揆勢が願い出た要求はほぼ通り1ヵ月に及んだ騒動もおさまりました。一揆の首謀者として夫神村組頭浅之丞と百姓半平が死罪となりました。

辞世の句 「散る花はむかしまことの習いかな 浅之丞
「いさぎよく散るや此世の花ふぶぎ」 半平



【文化の義民堀内勇吉】 文化6年(1809年)

文化6年6月27日、入奈良本の百姓が庄屋堀内佑助・藤五郎親子の不正や横暴を訴願するために上田城に押しかけました。百姓たちは城下町の間屋や割番に差し止められ押し問答の末、願書を奉行所へ差し出して引き上げました(愁訴)。問屋や割番は内済に終わらせようとしたが、組頭勇吉らは裁判を受けたいと主張し、内済扱いは失敗に終わりました。



奉行所での約一年にわたる吟味の末、願いは通りましたが、百姓たちには重い刑罰が下り、勇吉は永年の裁きで牢死しました。

【明治二年騒動】 明治2年(1869年)

版籍奉還の行われた直後の明治2年8月16日の夜半、入奈良本から百姓一揆が勃発しました。

17日になると一揆勢の数は次第に増加し、藩役人の制止を押しつけ上田城下に乱入しました。藩当局に強訴すると同時に、廣の新金貨の流通を警戒して取引を凍ったという理由などで、割番・庄屋・富商宅を269戸も打ちこわしました。この一揆は「世直し騒動」「チャラ金騒動」とも呼ばれています。

強訴した願書の内容は、廣二分金不通用令に損害の補償 米価高騰の取り締まり御用金の免除または延納 割番庄屋の廃止、などでした。上田藩は大幅に譲歩し、これらの要求の大部分を受け入れ、藩知事は一ヶ月半にわたる管内の農村を慰撫してまわりました。大きな事件でしたが検挙されたのはわずか6人でした。明治3年10月27日、首謀者として九郎右衛門はさらし首となりました。



義民太鼓



江戸時代の封建的な社会制度の中で、上田地域では百姓一揆が多く起こりました。青木村では己の死は覚悟の上で不正を正し圧政をはらいのけ、地域農民の生活を守ろうとして藩主に直訴し処刑された先人は義民として各地区で祭られ、供養されてきました。最初の一揆で直訴した庄屋の増田与兵衛の事件から300年にあたる昭和57年に青木村全体の顕彰活動として「義民祭」が開催され、義民の功績を後世に伝えるため「義民太鼓」がつけられました。義民太鼓は主に「青木村義民太鼓保存

会」で継承され、大人で構成する本来の保存会と小学生から高校生までの子供達を中心のこまゆみ会等があり活動しています。封建時代の圧政に対し生きる権利を主張するため、農民がとった最後の手段である一揆。竹に挟んだ訴状を掲げた先頭のが力尽きて倒れれば、次の者がその中間の尻を乗り越えてその志をつないでいく、というたくましい農民の姿を、和太鼓の演奏と口上により演じています。



古代遺跡発掘土器展示室

青木村の縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良平安時代の遺跡から出土した土器や石器等を展示しています。

【縄文時代】

縄文時代の遺跡は、田沢温泉の湯の平遺跡、中挾区の中挾遺跡・月夜平遺跡、夫神区の熟田遺跡があり、土器片とともに石斧・石匙などの石器も出土しています。



【弥生時代】

中挾区の月夜平遺跡や当郷区の榎遺跡、村松区の辻田遺跡などから箱清水式の土器が出土しています。



【古墳時代】

小県郡跡部郷(現在の青木村、室賀地区、浦里地区)に基盤を置いた武人(舎人)の古墳から、大刀(直刀)、勾玉、切り子玉、耳環等の装飾品や須恵器、馬具などが出土しています。大刀には三重心葉形文が表裏に施されています。ヤマト王権(大和朝廷)から東国舎人として認められた印の品と考えられます。



【奈良・平安時代】

この時代は信濃国分寺が造営され、東山道が整備されました。馬を生産する牧場が作られ、村内には牧場関係の地名が残されています。下奈良本区の牧寄遺跡では掘立柱建物跡が見つかり、浦野駅があったとされる当郷区の岡石遺跡・惣門遺跡からも竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土器類が出土しています。

栗林一石路資料展示室

青木村が生んだ偉大な俳人

栗林一石路

(農夫)

いっせきろ たみお

一石路の長男栗林一路氏から寄贈された一石路の日記(大正13年)、俳句メモ、俳句原稿、第一句集「シャツと雑草」、第二句集「行路」などの著書、一石路への献辞本、書簡、写真、文房具、日用品など200点以上の遺品と一石路関係資料などを保管・展示しています。



栗林一石路 (本名 農夫)

年譜

- 1894 (明治27年) 長野県小県郡青木村細谷に、父上野久五郎、母けさの二男として生まれる。父は小学校教員で俳諧の宗匠でもあった。
- 1905 (明治38年) 父久五郎が明治32年に急死したあと、母けさは一石路を連れて栗林徳十と再婚。栗林姓となる。
- 1911 (明治44年) 荻原井泉水らが「層雲」を発刊し自由律俳句運動を展開。一石路はその革新性に共感し加入、井泉水に認められる。
- 1921 (大正10年) 青木小学校の教員をしていた塩田出身の高藤たけじと結婚。この年青木村青年会が創刊した「青木時報」の初代編集主任となり、青木時報の基礎づくりに活躍した。
- 1923 (大正12年) 両親を青木村に置いて上京し関東大震災を体験。改造社に入社し編集に携わる。
- 1927 (昭和2年) 改造社を退社し、新聞連合社に入社。
- 1929 (昭和4年) 第一句集「シャツと雑草」発刊。
- 1931 (昭和6年) 層雲を脱退しプロレタリア俳句運動を興す。
- 1940 (昭和15年) 第二句集「行路」を発刊。
- 1941 (昭和16年) 治安維持法により検挙され2年3か月投獄される。
- 1945 (昭和20年) 敗戦を長野県蓼科にてむかえる。11月「民報」を創刊し編集局長となる。
- 1946 (昭和21年) 新俳句人連盟を設立し初代幹事長となり「俳句人」を創刊する。
- 1948 (昭和23年) 「民報」廃刊。
- 1949 (昭和24年) 妻たけじ急死。
- 1961 (昭和36年) 5月25日永眠(享年66歳)

一石路と青木村

青木小学校



大正時代の青木小学校
(現在の青木中学校の場所にあった)

明治34年、一石路は青木尋常小学校に入学し、明治42年同高等小学校を卒業しました。その頃の通知票を見ると、行状(行儀)以外はほとんど甲で成績はとてよかったです。

青木学校同窓會會報

明治38年から毎年発行された冊子で、村の若者たちの言論や文化を発信する場としての役割も果たしました。一石路も盛んに論文や詩、俳句などを投稿し、第14号(大正7年発行)と第15号(大正8年発行)では編集者としても活躍しました。



青木学校同窓會報

一石路が育った家

明治32年、一石路が5歳のとき、父上野久五郎が急死し、その後母けさが一石路を連れて栗林徳十と再婚したため、栗林姓になりますが、それ以降生活した家です。青年会活動に情熱を燃やし、妻たけじとの恋にときめき、新婚時代を過ごした家でもあります。一石路は2000を超す句を残していますが、そのうちの多くはこの家を舞台に作られました。



細谷 一石路の家(現在)



勝手口



一石路の家(大正時代)



玄関

一石路と俳句

「層雲」まで

一石路は俳諧せうかいの宗匠でもあった実父・上野久五郎の影響もあり幼いころから俳句に親しみました。明治44年萩原井泉水らが「層雲」を発刊して、自由律俳句運動を展開した頃、東京にいた兄文夫から送られてきた「層雲」の革新的な精神に共感し同人となります。毎号青木村から投稿された一石路の句は、井泉水の認めるところになります。



大正13年頃「層雲」投稿原稿

母に代りて米磨ぎしより二度の三日月
(大正3年)

プロレタリア俳句



第一句集「シャツと雑草」(昭和4年)
第二句集「行路」(昭和15年)

昭和4年、第一句集「シャツと雑草」を発表した一石路は、翌年「俳句は生きている」を「層雲」に発表し、プロレタリア作家としての態度を明確にし、昭和6年層雲を脱退します。以後「旗」「プロレタリア俳句」「俳句生活」などを創刊し、発禁と闘いながらプロレタリア俳句を発表します。

昭和16年、治安維持法により検挙され、2年ほど投獄されました。

大砲が大きな口あけて
俺に向いてゐる初刷 (昭和12年)

俳句人



戦争が終わり、戦前のプロレタリア俳句の仲間たちが中心となって新俳句人連盟が結成されました。一石路は初代の幹事長となり機関誌「俳句人」を創刊します。昭和24年からは、同連盟の委員長となり昭和29年まで5期務めています。

「俳句人」創刊号(昭和21年)

わが庭に声ごえ高し冬木の子ら
(昭和35年 絶句)

ジャーナリスト栗林農夫

青木村青年会と青木時報



大正10年青木時報創刊号

日露戦争後、日本には政治・社会・文化各方面で民主主義的な変革を求める運動(大正デモクラシー)が広がります。大正10年、青木村青年会は「青木時報」を創刊し、初代編集主任に一石路

が就任しました。この時代の時報は警察への届け出が義務付けられ多くは官制的色彩の濃いものでした。しかし青木時報は青年会が取材、執筆、編集を行い、村民の生活に根ざし農村の暮らしを改善していくことを目的としていました。現在では近代史を研究する貴重な資料となっています。

「改造」の編集者として

大正10年に斎藤たけじと結婚した一石路は新しい夫婦像とジャーナリストの道を目指して、青木村に両親を残し、塩田出身で「改造」の編集長をしていた横関愛造を頼って上京します。9月には関東大震災に見舞われますが、幸い被害もなく、逆にこの混乱の中で改造社が大震災誌を発行することになり、一石路は、改造社の臨時社員になります。のちに雑誌「改造」の正社員となり、その頃の進歩的な知識人との交流の中で、自分の思想を固めていきます。



「改造」編集長
横関愛造

同盟通信社の記者として

昭和2年、改造社を辞め、半年後に新聞連合社(後の同盟通信社)に入ります。一石路は、編集者より取材者の道を目指していたのではないかと推測されます。昭和13年9月、同盟通信社の社会部次長であった一石路は中国の広東へ従軍記者として特派されました。3か月の従軍記録は、翌年「兵隊とともに」として改造社から出版されています。



同盟通信 広東従軍

「民報」編集局長として



「民報」

「民報」は昭和23年、GHQの用紙統制により廃刊に追い込まれます。以後一石路は、俳句の指導活動や著述活動を行いました。昭和31年開放性肺結核を発病し闘病生活を続けますが、昭和36年5月25日永眠しました。66歳。

昭和20年、日本の敗戦とともに同盟通信社は解散しました。一石路は、進歩的な編集者と文化人らに呼びかけ民報社を設立し、新聞「民報」を発刊し、その編集局長に就任します。しかし

妻 栗林たけじ

(旧姓 斎藤たけじ、上田市塩田出身)

まいにち通る先生に村の山は枯れ (大正7年)

大正7年、塩田から峠を越えて青木小学校に通う斎藤たけじを細谷の畑で眺めていました。やがて大正10年に二人は結婚し、大正12年には両親を青木村に置いて上京します。俳句作家とジャーナリストとして活躍する一石路の陰で妻たけじは小学校の教員として家庭を支えました。昭和24年配給の芋をとりに行った帰りに脳溢血で倒れ急逝しました。

妻よだかれてふるさとの山へ帰ろうよ (昭和24年)



大正10年結婚

農民を愛し、庶民を愛し、郷土を愛した 栗林一石路

2000を超す一石路の句のうちの多くが青木村で作られました。

どつと笑ひしがわれには病める母ありけり (大正6年) 暗い山のほかはびつしり罌だ (昭和2年)
川音よふるさとの山のくらしき月夜よ (大正12年) ふるさとさむく身にせまりしんしん冬芽 (昭和12年)
しんじつたべ酔うた百姓のよろしき雨降り (大正13年) 滴々母のいのちにとほれ山の水 (昭和13年)
わが家めいて燃えさかる火の膝の子 (大正14年) たたかいはおわりぬしんと夏の山 (昭和20年)
まづゆたかにふるさとの火を焚く (昭和元年) いまは妻なしひえびえと青き竹を伐る (昭和24年)